

唐太宗の紀功寺院建設

— 政權正統論の形成をめぐる —

丸 橋 充 拓

貞觀三年（六二九）、唐の二代皇帝太宗李世民は、かつて各地の群雄と覇を競った戰場七箇所に仏寺を建設した。そして当時名声を博していた七人の文臣に命じて各々の碑文を撰述させ、造宮の縁起を広く世に知らしめた。

基本文献となる建寺詔には仏法によって戦死者を慰めようとする太宗の思いが切実に語られており、また七碑のうち現存する朱子奢撰「昭仁寺碑」（薛稷戰故地）と顔師古撰「等慈寺碑」（竇建德戰故地）の中にも彼の信仰に触れる文言が少なからず見受けられる。したがってそうした点を踏まえる限り、この事業が慰霊を目的に企画されたようにも考えうる。しかしながら両碑文を首尾満遍なく読み込んでいくと、これはもう太宗の武功に対する礼賛一色に塗り固められていることに否応なく気づかされる。『金石萃編』の撰者王昶は同書の按語において、昭仁寺碑の中で將士への哀悼を表明した部分が全文の一割にも満たぬことを根拠に、その本旨が太宗の紀功にあったことを看破しているが、碑文全体にバランス良く目配りした卓見と言えよう。

では紀功という趣旨の下、どのような背景があつて七箇所にも及ぶ寺院が建てられたのか。まず押さえねばならないのは、実際に太宗が群雄と戦つたのは唐の創業期、彼の親王（煬煒公・秦王）時代に当たる点である。つまり実際の建寺は終戦直後に始ま

ったわけではなく、直近のものでも九七年が経過している。このタイムラグからして、それが純然たる慰霊のみを目的に行われたわけではないことが窺われる。そして何より見過ごされてはならないのは、この間に玄武門の変という巨大な政治的断層が横たわっていることであろう。従来の研究には、この点に着目しつつ、七寺の創建を政変後の人心収攬や仏教界との宥和をねらつて着想されたものとする主張も少なからず見られる。ところが両碑の中には、そうした一仏教政策の枠組には収まりきらない強烈な政治臭を放つ記載も随所に見出されるのである。たとえば昭仁寺碑では武徳元年（六一八）七月に一度薛挙に敗れたことについて「太宗は和平路線を模索したものの、敵は聞く耳を持たず、逆に嘯みついてきた」と婉曲な言い回しで事実をほかし、また玄武門の変を経て登極する経緯についても「天命は逆らい難く、また大衆の熱望もあつてやむなく即位した」と武力クーデタの片鱗さえ表に出さない。また等慈寺碑には、太宗が戦乱をいち早く平定し磐石の治世を築いたことを強調すべく「孔子が『善人が国を治めてもそれが百年続かなければ悪人を除去できない』（論語子路篇）」と語つたのは誠に迂闊であつた」と記されているなど、先賢の不明を言ひ立てる文辞すらふんだんに織り込まれている。こうした表現からは、自らの戦功を華々しく顕彰し、その政權の正統性を広くアピールするのと同時に、都合の悪い事実は素知らぬ顔で揉み消せようとする太宗の意図が強く感得されるのである。

七人の撰碑者たちは、そのほとんどが山東や江南の名族出身、かつ唐の統一過程において秦王府の幕僚となつた者たちで占められる。また朱子奢・李百薬以外の五名が玄武門の変当時、秦王派に属しており、李百薬は高祖時代に左遷されていたところを即位

直後の太宗に登用された。さらに注目すべきことに四人までが、ちょうどこの頃より始められた悪名高き太宗朝の正史・実録編纂に携わっている。要するに彼らは貞観年間を通じて太宗の「正統神話」を仕立て上げた黒子たちなのである。確かに朱子奢や顔師古は仏教用語を縦横に駆使して碑文を見事に纏めており、七碑が何れも当時の知識人層の深い仏教理解に立脚して作り上げられていたことは容易に察せられる。しかし彼らが撰碑を任された理由としては、そうした宗教的素養よりも、新政権の正統性を具体的な公式ステートメントに変えて発信する役割を担っていたという面の方をより重く見るべきであろう。

以上の議論を要約するに、二寺の碑文は、太宗政権が①その発足直後から早くも正統論形成の動きを顕在化させていたこと、②実録等の編纂を通じて後世向けの正統論を準備するだけでなく、寺碑という公開性の高い媒体を用いることで同時代の人々に対しても広範に政治的喧伝を行っていたこと、を知りうる貴重な記録なのである。

『続高僧伝』に拠れば、七寺建造は明瞭という仏僧の建議を受けて着手されたという。彼は隋の煬帝の僧尼拜君親政策を挫折させた実績によって法琳等とともに同書の護法篇に列せられる人物で、貞観年間になってから太宗に召喚され、様々な進言を行った。彼が建寺の提案を専ら仏教界の得失のみに基づいて突きつけたのか、それとも太宗の置かれたデリケートな政治的立場を見透かした上で一挙兩得の妙策としてささやきかけたのか、その辺りの事情は定かではない。ただ彼自身は起工に先立つ貞観二年に死去しており、また他の仏教関係者が関わった形跡も見当らぬようである。したがって一連の造営過程が、概ね朝廷の主導で推進された

ことは想像に難くない。この事業が仏教界の要請とは別のところで育まれたすぐれて政治的な意図に端を発していたことは、そうした点からも透視しうる。

太宗をことさらに称揚しようとする動きは、何も貞観以降に始まったことではない。竇建徳・王世充平定直後の武徳五年（六二二）には、等慈寺の東二〇数キロの広武山に戦勝を記念して「観音寺碣」が建てられた。等慈寺碑の先蹤をなす石刻が高祖時代に早くも作成されていたのである。撰者陸德明は、戦後一流の碩学で、王世充への屈服を拒んで隠棲していたが、戦後李世民の幕下に参じ、秦王府学士に列せられた。つまりは彼も黒子の一人だったのである。しかもこの碣は当時一親王に過ぎない「秦王」の語を用いるに際し、「勅」「大唐」と同じく改行のうえ一格上に置くとという他に類を見ない擡頭を施している。これをもって彼が武徳中よりすでに天子の下にも置かぬ扱いを受けていたとまで即断するのはさすがにためらわれるものの、彼は周知の通り、自身が平定した関東では独自の占領統治を相当程度行っており、文臣たちとともに一種の演出としてこうした石刻をつくり上げたとしてもさほど不思議ではあるまい。

紀功寺碑建立の連鎖は太宗の死後にまで受け継がれる。高宗の顕慶四年（六五九）に、皇帝自身の手になる「大唐紀功頌」が等慈寺内に掲げられたのである。おそらく太宗の数々の武功の中でも竇建徳・王世充との一戦は唐朝創立のとりわけ重要なエポックと見なされ、「観音寺碣」「等慈寺碑」そして「紀功頌」と三次にわたって続けられた顕彰事業を通じて次第に「伝説」の色合いを深めつつ、後世へと語り伝えられていったのであろう。